

さあはれとてくればあはれひさかた
きりぬき見まはさうしひんを

名紙よりきりて

有るに成るはさしはれ
もくえしはれしりしひんを

此歌諸本同今據古今著聞集附之

宮河歌合

作者西行法師
別者定家卿

一番

丸

玉津宮海人

あ代ま山白丸魚のちや松小風あさきたあゆふ

右

三輪山老翁

あまの山白丸魚のちや松小風あさきたあゆふ

丸太歌義隔丸信興入幽玄杉上之風聲摸

柳本之露詞見宮河之流深蒼海之底

短慮易迷濱才難及者歌の先為持

一番

一丸

白濁をうきしぬはたまたま谷城をひらきつるふり

右

わきてんふを運ばしりなりあふまきあつしうもむとあは

まはふふまのあはむれたるのもはくしりあは

あくれらる春を岡山乃てはふふふらむと

ふふふふにひくひとあふまふあふのふふふ

峯小雲はたをたてふらふまひまひら

一番ふふふふふふふふふふふふふふふふ

はたはふふふふふふふふふふふふふふふ

くくくくくくくくくくくくくくくく

三番

左

あふまゆりくはあそふなふふふふふふふ

右

わくれ生る春はくもじあふりてはあふふふ

右の舟も初だくふふふふふふふふふふ

ゆらゆらすあはむあふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

はあふふふふふふふふふふふふふふ

四番

右

古栗うやく谷行萬さうくく我ちんふとやん

右

ふ山之音とまうくはあふはしめめとやん

右對紅梅之濃香感黃鳥之妙曲九聞新

語之好音閑田泉之閑居景氣雖異歌詞

是均者歟

五番

九

雲いぬのたけり感成思とてくくあひふく

右

あく入とむたはあはれあはれあはれあはれあはれ

六并くうううううううううううううううう

花よふとを母とあはれ思ふふはもあはれ

うあふとあふう白くあはれあはれあはれあはれ

うーのくあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

六番

右

うきとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

右

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

七番

左

心橋のうきとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

右

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

春はつゆとゆきと花と雪とをいふはたゞのうきとゆきと花と雪と

志のくもつ海にのちあつては乃こ舟
まろふあふふけ勝るす

八番

九

何れぬたよ世にのちあつては乃こ舟

六

浮せよと光とつと馬肉らとと花をわ

花を思ふあまのりしまらけり

ぬこけ減わくゆへとよたれあふらや

あつてをまか人をたふしむるゆへ

数もれを葉よあつては乃こ舟

ちよこつ入るけまのちまのち

九番

七

世にぬたよ世にのちあつては乃こ舟

六

起るぬたよ世にのちあつては乃こ舟

右守の羽根く海とつとたつては乃こ舟

ひらのをさくらもつとつとたつては乃こ舟

とあつては乃こ舟とつとつとたつては乃こ舟

乃そあまてりふとて思ひ今も他者れやあ
くふやふれらむなる事なりけりけりけりけり

あね

十番

丸

風より暑れは秋は花の香もたまりあはれ

丸

世より秋はあはれとて思ひ今も他者れやあ

きよなる事なりけりけりけりけりけり

若風とて思ひ今も他者れやあ

心同たくとて思ひ今も他者れやあ

備とて思ひ今も他者れやあ

十一番

丸

系とて思ひ今も他者れやあ

右

月はとて思ひ今も他者れやあ

仲秋とて思ひ今も他者れやあ

しあふ事なりけりけりけりけり

長秋とて思ひ今も他者れやあ

ひのき月夜をて回へきとてうらやま
あはれと来らまもなまふ及ふゆへやま
らひ

十二番

左

まよふかゝ奥の志吹きと波をきつて秋の月

右

月すこくゆくまよふかゝるやなまよふまのま
清くくすまふ酒園乃る所の松をゆき
ふちかゝるまよふかゝるやなまよふまのま

姿ふつふていさふきとけりまよふまのま
ゆへと又ねあひくまよふまのまゆへと
宋徳院乃百首沖製の中へ浦をけりま
まよふかゝるまよふかゝるまよふかゝる
おまふまのまゆへとまよふかゝるまよふ
ゆへとまよふかゝるまよふかゝるまよふ
まよふかゝるまよふかゝるまよふかゝる

十二番

左

まよふかゝるまよふかゝるまよふかゝる
まよふかゝるまよふかゝるまよふかゝる

右

ついでに後より月を照らす光は
左より月を照らす光は
いふことやいふことあるが
と云ふことあるが
ゆゑに

十四番

左

月のことや月を照らす光は
右

ついでに後より月を照らす光は
左より月を照らす光は
いふことやいふことあるが
と云ふことあるが
ゆゑに

十五番

左

ついでに後より月を照らす光は
左より月を照らす光は
いふことやいふことあるが
と云ふことあるが
ゆゑに

右

ついでに後より月を照らす光は
右より月を照らす光は
いふことやいふことあるが
と云ふことあるが
ゆゑに

らあひのひのあつたつたあひのあ
まのあひのあひのあひのあひのあ
光と危清くあひのあひのあひのあ

十七番

左

うあひのあひのあひのあひのあひのあ

右

あひのあひのあひのあひのあひのあ
月をうあひのあひのあひのあひのあ
あひのあひのあひのあひのあひのあ

十七番

左

秋のあひのあひのあひのあひのあひのあ

右

あひのあひのあひのあひのあひのあ
あひのあひのあひのあひのあひのあ
あひのあひのあひのあひのあひのあ
あひのあひのあひのあひのあひのあ
あひのあひのあひのあひのあひのあ

十七番

七

山更みぬとけりも人ごころ集むるはゆきとさして
ち

小倉山麓をこしり夕音もよみしらるる初めは声
ももろくさあひさしゆめいとまほしきあはれま
つねとくちりしりまよるは務も一

十九番

左

白雲つらよけりて居たり思ふはあはれま

右

鳥羽よもまき流るるて居るはよみしはあはれま
あはれまもまき流るるて居るはよみしはあはれま
あはれまもまき流るるて居るはよみしはあはれま
あはれまもまき流るるて居るはよみしはあはれま

大番

七

海よりわがこころはあはれまもまき流るるて居るは
右

あはれまもまき流るるて居るはよみしはあはれま
あはれまもまき流るるて居るはよみしはあはれま

今更なるはつと勝とて人通

女三番

左

あまのこゝろあはれは海に社神の歌波のし

右

樹生人かめあはれは海に社神の歌波のし

左は新波のしと細涼乃いしく海こと

こゆるはらあま

女三番

左

あまのこゝろあはれは海に社神の歌波のし

右

あまのこゝろあはれは海に社神の歌波のし

あまのこゝろあはれは海に社神の歌波のし

あまのこゝろあはれは海に社神の歌波のし

月仍為持

女三番

左

あまのこゝろあはれは海に社神の歌波のし

右

九

時... (Faint handwritten text)

者

カ... (Faint handwritten text)

... (Faint handwritten text)

... (Faint handwritten text)

... (Faint handwritten text)

出九番

左

... (Faint handwritten text)

右

... (Faint handwritten text)

... (Faint handwritten text)

... (Faint handwritten text)

... (Faint handwritten text)

... (Faint handwritten text)

... (Faint handwritten text)

... (Faint handwritten text)

... (Faint handwritten text)

世番

廿九

まゝに相方種草のうらまへをあらわすに
右

何れも海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは

廿一番

九

まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
右

まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは

廿二番

九

まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは
まゝに海に流るるはしきも海に流るるは

右
松平の波もさうはうしめ其をてしおく
其の左もさうしめ其をてしおく
其の右もさうしめ其をてしおく

妙の妻

左

うらむとて月もあすあつたあつた
名

かゝるに世もなほ佳きしぬかた
左

左
左
左

左
左
左

あつたあつたあつたあつた

卅四番

左

あつたあつたあつたあつた

右

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつた

左

弟乃とて一あるにま祭るふれりたあつとさ
 じしんもあつたのちも一ききたてははら
 何れかたきつらぬのたはらつらあ人ぶ
 ともあつたえらさぬと春のあつたあ
 弟一思ひをたぬくちあつたぬとひ一ま
 のらつたあつたあつたあつたあつたあ
 あつたあつたあつたあつたあつたあ
 ちつたあつたあつたあつたあつたあ
 うつたあつたあつたあつたあつたあ
 ちつたあつたあつたあつたあつたあ

弟乃とて一あるにま祭るふれりたあつとさ
 じしんもあつたのちも一ききたてははら
 何れかたきつらぬのたはらつらあ人ぶ
 ともあつたえらさぬと春のあつたあ
 弟一思ひをたぬくちあつたぬとひ一ま
 のらつたあつたあつたあつたあつたあ
 あつたあつたあつたあつたあつたあ
 ちつたあつたあつたあつたあつたあ
 うつたあつたあつたあつたあつたあ
 ちつたあつたあつたあつたあつたあ

尊子く曰富きつうき高よきけしてひたかか國位と
 往きの朝とくは近村ぬ此哥合ひ玉録をあらたはれ
 とと秘藏乃ぬるり未代よき敷りり此字よとへま
 しきさうり世ふ西村は六封属したくゆつるるるとい
 ちふ二まの哥合録とつとまきめをゆしくと内り
 たつと世は彼つ世重代り男もとてふとくくせあひ
 人ふとくして新古今此撰者にそつと重代の筆者定
 家卿よけつひくこま必このをゆつとくき事りり後
 とにや後鳥羽院とつとて哥乃道也とつとける比後京
 極敷より合まつとせらとせり歌とて後敷考をゆせらとを

向る家隆は未代り人ぬよまゆ也彼り哥とまふとを
 うふとくことと後まよひはふあまつととあひり
 と人れ相とくれは事ふひ合せらとてりあたく
 おゆとゆさうり後二卷乃哥合ひ家お高れりらふ
 備りりしてゆめや



群書類従卷第三十七

右歌合の古本未校合畢且抄出古今著詞集以備考證也

卷之三

三



蘇州府志卷之三

蘇州府志卷之三

蘇州府志卷之三

蘇州府志卷之三

蘇州府志卷之三

蘇州府志卷之三

蘇州府志卷之三

蘇州府志卷之三

